

外国人共生 言葉の壁

やまぬ騒音 団地住民ため息

「外国人の入居お断り」の張り紙を掲げた福岡市のマンションを巡る記事を9月3日付の西日本新聞朝刊に掲載したところ、心を痛めている外国籍の人々に対する共感の言葉の一方、外国人入居受け入れに否定的な意見も寄せられた。中でも、近隣に外国人が暮らしている団地住民の声は「階下への配慮が全くない」「言葉が通じずお手上げ」と切実だった。日本人と外国人の共生には何が必要か。住民に話を聞いた。



「外国人の騒音に日々悩まされています」。福岡市郊外の団地に住む70代男性

母国語サポート 生活橋渡し

日本で暮らし働く外国人が増え、異文化との摩擦が顕在化する一方、外国人の入居に積極的な賃貸住宅もある。「ビレッジハウス・マネジメント」(東京)が管理する物件には、入居手続きや生活の支援に外国語で対応するサービスがある。居住者に占める外国人は全国で2割に上り、福岡県には4割を占める集合住宅も。外国人と日本人の住民が一緒に防災訓練をしたり、親睦会を開いたりしている物件もある。

東京の管理会社

福岡市博多区のJR吉塚駅から徒歩5分ほど。昔ながらの団地のような集合住宅で、ベトナム出身のウェン・ティ・フォン・ディエンさん(30)は家族4人で暮らす。「外は古いけど、中は契約時に日本人の保証人はまったく問題ないですよ。畳敷きだった床はフローリングに改修され、真白い壁には4歳の長女と生まれたばかりの長男の写真が並ぶ。

築48年の2DKで家賃は5万2千円。安さと利便さだけでなく、最大の魅力は居住者の国籍に合わせ、階

段の踊り場などにはベトナム語やネパール語でごみ出しなどの生活ルールをまとめた紙が張ってある。同社が管理するのは全国で約1060物件、約10万7千戸。炭鉱閉山などで転職する労働者を支援するため国が建設した旧雇用促進住宅がほとんどで、買い上げてリノベーション(大規模改修)を施した。外国人居住者は年々増えており、2022年度の新規契約者の約3割は外国人という。「外国人の技能実習制度

はため息をつく。静かな分譲団地での生活が一変したのは半年前。2階上の5階にアジア系外国人一家が入居してからだ。夕方に床の上で椅子を引きずる音が響き、風呂場から大音量の音楽が流れるようになった。4階の住民が直接注意し、警察官が来たこともあった。が、すぐさま騒音が…。管理組

合に相談しても言葉が通じず、うちが明かないんです」。団地は築40年を超え、住民の高齢化が進む。別の棟でも、日本人が退去して空室になった部屋に外国人が入るケースが増えてきた。「外国人は今後も増えるでしょうが、住民はみんな年を取り、自分たちで問題を解決する力が残って

いない」と男性の苦悩は深い。「差別はいけないというポリシーだったけど、不安とかやかましかとか言わざるを得ない。自分でも矛盾しているなと思う」とも語る。

わざと騒音を立てているわけではないだろうし、生活音を巡る感覚や文化の違いがあるのは間違いない。言葉が通じないがゆえの誤

解もあることは理解している。男性は「外国人だから嫌というわけではありませぬ。入居時に日本の文化やマナーを教え、日本人の住民との間を仲介する組織が必要だと思う」と話し、行政や不動産会社の力で、国籍に関係なく住民同士が穏やかに暮らせる仕組みを整えてほしいと力を込めた。(野村創)



ビレッジハウス・マネジメントが管理する物件で2年ほど暮らしているベトナム人のウェン・ティ・フォン・ディエンさん(15日、福岡市博多区)

の見直しが進み、労働者はもっと増える。外国人の比率や佐賀県などでさらなる物件の提供を検討中という。

九州支社(福岡市)にベトナム語と英語、東海支社(名古屋)にポルトガル語に対応するサポートチームを設置し、全国の居住者から電話でつながる仕組みを整えている。福岡では需要に合わせてネパール人スタッフも新たに確保した。

外国人も日本人も互いに安心して暮らせる環境をつくるため、居住者が参加する防災イベントなども企画する。岩元社長は「外国人だから悪いのではない。生活ルールやマナーを母国語で理解できれば居住者同士のトラブルは避けられる」と話した。(森井徹)